

高校生の自己愛と居場所の選択や居心地との関連

Relationship between the Narcissism in High School Students and the choice of their Comfortable places

浅川 潔 司* 檜皮 万里子** 南 雅 則***
ASAKAWA Kiyoshi HIWADA Mariko MINAMI Masanori
佐々木 聡**** 真田 穰 人*****
SASAKI Satoshi SANADA Shigeto

本研究の目的は、高校生の自己愛傾向と学校内外における居場所の選択数との関係について検討し、高校生の心理的援助のための資料を得ることであった。A県下の公立高校生988人が本研究に協力者として参加した。内訳は1年生485人(男子255人, 女子230人), 2年生260人(男子121人, 女子139人), 3年生243人(男子112人, 女子131人)であった。自己愛傾向の測定には、小塩(1999)の自己愛人格目録短縮版(以下, NPI-S)から18項目が用いられた。また、居場所と居心地の測定には、檜皮(2003)の居場所と居心地目録20項目が用いられた。主な結果は以下の通りである。(1)自己愛水準L群1年生では男子より女子の居場所選択数が多く、自己愛水準L群2年生では女子よりも男子の居場所選択数が多かった。(2)「他の人と一緒に過ごせる空間」得点は、「注目・賞賛欲求」「優越感・有能性」「自己主張性」のすべてにおける群の主効果が有意であり、いずれもL群, M群, H群の順に得点が高かった。(3)「周囲に人がいても一人で過ごせる空間」得点は、「優越感・有能性」における群の主効果が有意であり、いずれもL群よりもH群の得点が高かった。(4)「周囲に人がいない自分だけの空間」得点は、「注目・賞賛欲求」「自己主張性」における群の主効果がそれぞれ有意であり、いずれもL群よりH群の得点が高かった。以上の結果について、学校心理学的な側面から考察が行われた。

The present study was designed to investigate the relationship between the Narcissism in the high school students and their choice of comfortable places. Nine hundreds and ninety-eight high school students from two prefectural high school participated in the study. Their narcissism was measured by the NPI-S (Oshio 1999). The hiwada's inventory of the perceived comfort places (2003) was used for the measurement of the choices of the comfortable places in high school students. Main findings were as follows;

- 1) the place choose as the comfort place was categorized as three groups; that is, place staying with other peoples, place staying alone, place staying alone at with the other people.
- 2) At those places, students with higher narcissism score showed significantly higher mean scores than the students with lower narcissism scores.

Those findings were discussed from the viewpoints of school psychology.

キーワード：自己愛, 居場所, 高校生, 学校心理学

Key words : narcissism, comfortable places, school psychology, high school students.

問題と目的

高校生の心理について、15・6歳の年代で人間関係にヤマアラシ・ジレンマが起きていると落合(1999)は指摘した。すなわち、高校生は友人関係や異性関係など対人関係で相手に近づき、心を開いてより親密になろうとして、自分に内面をみせる。しかし、自分に自信がもてないため、自分をわかってくれる人を求めようとするが、人を求めて内面的に近づくこと自体、自分の不安定な状態を相手にさらけ出すことになる。人に近づき支えてもらいたいという願望があるが、自分を出して傷つくこと

も経験するので、自分を出すことには慎重になる。近づきたいが近づくことと傷つくのでジレンマに陥るといふ。また、自分の容姿への過剰な関心や自分を認めてほしいという認知欲求や他者評価に強く影響されるのも思春期や青年前期の特徴である(大淵, 2003)。したがって、このような自己に対する強い意識のため、たいいていの人が多かれ少なかれ自己愛的になると考えられる。

自己愛は、「自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能(Stolorow, 1975)」であり、「自己を価値あるものとして体験しようとする

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻学校心理・発達健康教育コース **兵庫県立明石西高等学校 ***宝塚市立光が丘中学校

****松蔭中学校高等学校 *****大阪市立新高小学校

平成26年10月31日受理

心の働き（上地，2004）」である。このような定義に基づくならば、正常な自己愛のあり方は、自己を価値あるものと体験するためにはそれを認めてくれる他者が必要なことを自覚しており、多少の不安や恥を感じながら自己の価値を他者に認めてもらおうとするようなあり方であり、病的な自己愛とは、自然な自己愛を抑圧または否認し、それに代わる不自然な自己確認、自己尊重に依存しているようなあり方である（上地，2004）。

自己愛についての研究は、Raskin&Hall（1979）による Narcissistic Personality inventory（自己愛人格目録、以下 NPI）によって、自己愛の測定的研究が助長され、正常人をも対象とする数多くの実証的研究を生み出すこととなり、自己愛人格傾向の強い者ほど、エネルギーで外向的、自信家、自己本位、競争的、攻撃的であり、共感性に乏しいことなどが明らかにされてきた（宮下，1991）。

また、青年期における自己愛傾向は、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚やその感覚を維持したいという強い欲求によって特徴づけられる（小塩，1998）ことが明らかにされてきた。小塩（1999）によれば、NPI から「優越感・有能感」「注目・賞賛要求」「自己主張性」に対応した NPI-S を開発し、友人関係のあり方と自己愛傾向の関連を検討している。その結果、自己愛傾向の高い男子高校生はクラスメイトから好かれ、比較的多くの友人との関係をもっていることが、友人に今以上に理解・信頼されたい、自分に関わってほしいという欲求をもつことが示唆されている。つまり、自分は優れていると思っても周囲がその自己愛的な欲求を満たしてくれない時、青年は現状に満足できず「自分をもっと評価してくれる場所があるはずだ」「もっと認めてくれる人がいるはずだ」と居場所を次々に変えてさまよい歩いたり、「自分を認めてくれない周囲が悪いのだ」と現在の生活に不満を抱き続け、周囲の人々とトラブルを起こす（小塩，2004）ことになる。

このような青年期の自己愛の特徴から高校生の対人関係をみると、自分自身に対する肯定的評価が崩れる可能性が高くなるような対人関係を回避して広く表面的につきあうことや、一見周囲と楽しくつきあっているが、自分の本音を出さず表面的で互いに気遣うといった傾向があるように思われる。したがって、自己愛傾向が強い高校生にとっては心が安らぐ場所がなく、自分の正直な感情などが表出されにくくなっているのではないかと考えられる。

自己愛傾向が強い高校生にとって心が安らぐ場所、すなわち「居場所」があるのかという点について述べる前に、「居場所」の定義に触れておきたい。「居場所」という言葉の定義は未だ確立されているとはいえないが、現

代においての「居場所」という言葉には、単に人がいる所という物理的な意味だけではなく、心理的な側面が含まれる（杉本・庄司，2006）というとらえ方がひろがりつつある。住田（2003）によれば、子ども自身がホッとできる、安心できる、心が落ち着ける、そこにいる他者から受容され肯定されていると実感できるような場所が子どもの「居場所」であり、これは子どもが自分自身で解釈し実感した感覚的意味（主観的条件）を〔関係性－空間性〕という形で一体化された一組の客観的条件に付与することによって形成されるという。そこで本研究においては住田（2003）の定義に倣い、「居場所」を「生徒自身がホッとできる、安心できる、心を落ち着かせることができる、そして、そこにいる他者から受容され肯定されていると実感できるような場所」と操作的に定義することとした。

中高生を対象とした「居場所」の研究は、教師や仲間との対人関係のあり方が「居場所」の形成に重要な役割を果たす（小畑・伊藤，2001；小畑・伊藤，2003；富永・北山，2003；藤井，2003）との報告があり、物理的な場所の如何に関わらず、子ども自身がその場所に「居場所」としての意味を付与することにより構成される（住田，2003）ものであることが指摘されている。中高生の「居場所」の形成には性差が見られ、男子よりも女子の方が対人関係を重視する（大久保，1999；秦，2000）ことや、女子は「居場所」において自分から受け入れられていると感じること、男子は自分で自分を受け入れられていると感じることが重要（杉本・庄司，2006）であることが明らかにされてきた。また、「居場所」の選択には中学生と高校生で違いがみられ、中学生では家族関係、高校生では物理的環境が「居場所」の有無の決定要因（杉本・庄司，2006）であることが明らかにされている。

また、檜皮（2003）による、高校生84名を対象とした、一人あるいは友人と過ごす時に心が落ち着く場所についての調査の結果、一人の場合では自宅・自分の部屋が一番多く（65%）、次いで教室（18%）、部室（7%）であり、友人の場合では、教室が一番多く（40%）、次いで友人宅（20%）、部室（19%）、通学路（8%）、ファーストフードストア（7%）であった。こうした結果は、高校生が学校の内外に物理的環境としての「居場所」を形成していることを示唆している。

以上のことから、高校生は自分の「居場所」を変えることによって、周囲からの評価を得ようとしたり、あるいは自分が傷つかないようにしていると考えられる。また、自己愛が高校入学後においては親しい友人や所属する集団の獲得に成功し、仲間集団にうまく溶け込むことと深く関係している（小塩，1999）ということをもふまえるならば、自己愛が「居場所」の選択に関与していると考えられる。そこで、本研究では高校生の「居

場所」の選択を自己愛の側面からとらえることとし、高校生の自己愛傾向と学校内外における居場所の選択数との関係、ならびに高校生が感覚的意味としてとらえている居場所と居心地について検討を行い、高校生の心理的な援助に資することを目的とした。

方法

研究協力者 A県下の公立の二つの高校に在籍する生徒計988人が本研究に協力者として参加した。内訳は1年生485人（男子255人，女子230人），2年生260人（男子121人，女子139人），3年生243人（男子112人，女子131人）であった。

調査時期 200X年12月から200X+1年2月の期間に学年別で調査は実施された。

質問紙 自己愛傾向の測定には、小塩（1999）の自己愛人格目録短縮版（以下、NPI-S）の各因子のうち高負

荷を示した18項目が用いられた。また、居場所と居心地の測定には、檜皮（2003）の居場所と居心地目録20項目が使用された。いずれも回答は4件法で求められ、学級単位の集団場面で場面で教師の教示の下、一斉に実施された。

結果

NPI-S（18項目）の確認的因子分析 NPI-S（18項目）が小塩（1999）と同様の3因子構造となることを確かめるために共分散構造分析を用いた確認的因子分析を行った。全ての因子間に共分散を仮定したモデルで分析をおこなったところ、適合度指標はGFI=.90, AGFI=.88, RMSEA=.07で、概ね満足できる結果であった。Table1にこの最終的なモデルの結果を示す。因子名は小塩（1999）と同様に、第1因子「注目・賞賛欲求」6項目、第2因子「優越感・有能性」6項目、第3因子「自己主

Table 1 NPI-S（18項目）の確認的因子分析結果（標準化推定値）

	I	II	III
【注目・賞賛欲求】			
14 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	.88		
5 私は、どちらかと言えば注目される人間になりたい	.86		
11 私は、人々の話題になるような人間になりたい	.80		
2 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	.79		
8 私は、みんなからほめられたいと思っている	.72		
17 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	.66		
【優越感・有能感】			
4 私は、周りの人達より、優れた才能を持っていると思う		.84	
1 私は、才能に恵まれた人間であると思う		.80	
7 私は、他人よりも有能な人間であると思う		.84	
10 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている		.76	
13 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている		.66	
16 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う		.65	
【自己主張性】			
6 私は、自分の意見ををはっきり言う人間だと思う			.77
3 私は、自己主張が強い方だと思う			.78
9 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う			.69
15 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ			.56
18 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう			.60
12 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振舞っている			.46
	因子間相関		
	I	.53	.58
	II		.57
	III		

GFI=.90, AGFI=.88, RMSEA=.07

Table 2 居場所と居心地目録の探索的因子分析結果 (バリマックス回転)

	I	II	III
【他の人と一緒に過ごす空間】 $\alpha=.77$			
14 私にとって、友達の部屋は、居心地がよい	.89	.00	.10
13 私にとって、友達の家は、居心地がよい	.83	.00	.09
15 私にとって、コンビニは、居心地がよい	.51	.03	.02
20 私は、ファーストフード店にいる時、居心地がよい	.47	.02	.01
【周囲に人がいても一人で過ごせる空間】 $\alpha=.86$			
6 私は、図書室にいる時、気持ちが落ち着く	.01	.87	.08
19 私は、図書館にいる時、気持ちが落ち着く	.04	.85	.11
【周囲に人がいない自分だけの空間】 $\alpha=.70$			
12 私は、自分の部屋にいる時、心が安らぐ	.05	.03	.80
11 私は、自分の家にいる時、心が安らぐ	.00	.03	.66
1 私は、一人で時間を過ごす時、居心地のよい場所がある	.09	.12	.53
累積因子寄与率	23.65	41.37	54.10

Table 3 自己愛水準・性・学年別の居場所選択数の平均値 (標準偏差)

	L群		M群		H群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1年生	2.54 (.45)	2.76 (.29)	2.77 (.32)	2.88 (.28)	2.88 (.30)	2.84 (.31)
2年生	2.74 (.31)	2.63 (.31)	2.76 (.36)	2.78 (.28)	2.70 (.33)	2.78 (.30)
3年生	2.69 (.45)	2.67 (.32)	2.83 (.23)	2.77 (.31)	2.73 (.29)	2.88 (.23)

張性」6項目とした。(Table 1 参照)

居場所と居心地目録の探索的因子分析結果 居場所と居心地目録の構造を検討するため、檜皮 (2003) の居場所と居心地目録 (20項目) について、主因子法-バリマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、第1因子4項目、第2因子2項目、第3因子3項目の計9項目が検出された。第1因子は、「友達の部屋」「友達の家」「コンビニ」「ファーストフード店」といった特定の誰かや他人と一緒にいる (近くにいる) 空間に関する項目で構成されていたため「他の人と一緒に過ごせる空間」と命名した。第2因子は、「図書室」「図書館」という周囲に人はいるが静かで干渉されず一人で過ごすことのできる空間で構成されていたため「周囲に人がいても一人で過ごせる空間」と命名した。第3因子は、「自分の部屋」「自分の家」「一人で時間を過ごす」という自分だけの空間に関する項目で構成されていたため「周囲に人がいない自分だけの空間」と命名した。なお、各因子の信頼性係数は、第1因子 $\alpha = .77$ 、第2因子 $\alpha = .86$ 、第3因子 $\alpha = .70$ という値であった (Table 2 参照)。

自己愛傾向と居場所の関係

居場所の有無について、居場所と居心地目録 (9項目) の質問項目について「4」「3」「2」と回答したものを1 (居場所あり群)、「1」と回答したものを0 (居場所

なし群) としたうえで、各群の居場所選択数の得点を算出した。次に、NPI-S (18項目) の合計得点について、最低値から平均値-1/2SDまでをL群、平均値+1/2SDから最高値までをH群、中間にあたる残りをM群の3水準に群分けした。自己愛水準群・性別・学年群別の居場所の平均選択数は Table 3 に示す通りであった。

居場所選択数を開平変換した値を従属変数とし、3 (自己愛水準) \times 2 (性) \times 3 (3学年) の3要因の分散分析を table 4 に基づいて行ったところ、2次の交互作用 ($F(4,685) = 2.79, p < .05$) と群の主効果 ($F(2,685) = 11.21, p < .001$) が有意であった。そこで単純・単純主効果の検定を行ったところ、性の単純主効果がL群1年生においてみられ、男子より女子の居場所選択数が多かった ($F(1,685) = 8.49, p < .01$)。L群2年生においては、同様の単純主効果がみられ、女子よりも男子の居場所選択数が多かった ($F(1,685) = 4.43, p < .05$)。また、多重比較の結果、L群 < M群 < H群 (くは5%水準で有意差があることを示す) の順に居場所の選択数が多かった。

自己愛傾向と居場所の選択と居心地との関係を検討するために、男女別にNPI-Sの下位尺度別の合計得点について最低値から平均値-1/2SDまでをL群、平均値+1/2SDから最高値までをH群、中間にあたる残りをM群の3水準に群分けした (Table 4)。その後、居場所と

Table 4 自己愛水準・時期別の居場所と居心地得点の平均値と標準偏差

	注目・賞賛欲求						優越感・有能感						自己主張性					
	L群		M群		H群		L群		M群		H群		L群		M群		H群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
他の人と一緒に過ごす空間	7.59 (2.62)	7.53 (2.49)	8.82 (2.55)	8.83 (2.49)	9.32 (2.85)	9.60 (3.10)	7.86 (2.62)	8.14 (2.77)	9.03 (2.50)	8.74 (2.67)	9.17 (3.00)	9.92 (2.62)	7.61 (2.52)	8.12 (2.82)	8.75 (2.46)	8.60 (2.68)	9.57 (3.02)	9.31 (2.78)
周囲に人がいても一人で過ごす空間	3.94 (1.72)	3.97 (1.87)	3.80 (1.70)	4.03 (1.69)	4.17 (1.98)	4.39 (2.09)	3.63 (1.61)	4.03 (1.89)	3.94 (1.69)	4.07 (1.75)	4.38 (2.08)	4.44 (2.01)	3.71 (1.56)	3.99 (1.76)	4.11 (1.82)	4.17 (1.86)	4.07 (2.02)	4.18 (2.01)
周囲に人がいない自分だけの空間	9.34 (2.18)	9.54 (1.87)	9.10 (1.90)	9.61 (1.98)	10.10 (1.81)	10.18 (1.85)	9.20 (2.19)	9.66 (1.96)	9.59 (1.80)	9.80 (1.86)	9.87 (1.91)	9.89 (1.94)	9.19 (2.09)	9.42 (2.01)	9.55 (1.96)	9.89 (1.90)	9.88 (1.89)	9.92 (1.83)

上段: 平均値, 下段: 標準偏差

Table 5 分散分析結果 (F 値)

	注目・賞賛欲求	優越感・有能感	自己主張性
他の人と一緒に過ごす空間	27.83 *** L<M<H	18.01 *** L<M≤H	17.93 *** L<M<H
周囲に人がいても一人で過ごす空間	2.75 † M≤H	5.31 ** L<H	
周囲に人がいない自分だけの空間	11.62 *** L・M<H 3.11 † 男≧女	2.94 † L≤H	5.28 ** L≤M, L<H

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

居心地目録の下位尺度別の合計得点を従属変数とし、NPI-Sの下位尺度別の群と性を独立変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、「他の人と一緒に過ごす空間」得点は、「注目・賞賛欲求」「優越感・有能性」「自己主張性」のすべてにおける群の主効果が有意であり、「周囲に人がいても一人で過ごす空間」得点は、「優越感・有能性」における群の主効果が、また「周囲に人がいない自分だけの空間」得点は、「注目・賞賛欲求」「自己主張性」における群の主効果がそれぞれ有意であった。なお、交互作用はみられなかった。その結果は、Table 5に示すとおりであった。

考察

自己愛傾向と居場所の選択数との関連性

L群の1年生では女子群が、2年生では男子群がそれぞれ居場所の選択数が多かった。総務庁(1991)の報告によると、中高生の友達のつき合い方は、女子では男子よりも深く広いつき合い方がみられたと報告されている。居場所の選択数をどのように考えるかにもよるが、それが単に交友関係の広がりの一つの指標であるとするれば、総務省の報告は自己愛水準の低い生徒群においては適用できるが、中・高水準の生徒においては、この報告が、15年も前の調査結果であり、現在もそのようにいえるのかという点で疑問が残る。一般的には、自己愛水準が高くなればなるほど、他者と個人的に深く付き合うことによって、自己が傷つくと考える自己愛的人格の青年は増加している。このような心理状態が、自己愛の水準群別に見ると、L群<M群<H群の順に居場所の選択数が有意に増加するという結果に繁榮されているように考えら

れる。つまり、親密な個人との深い関係性は回避され、あちこちで表面的な付き合いを広くしている傾向があることをこの結果は示唆していよう。

また、先の報告では男子は高校生になると中学生の時と比べると「友達というより一人であることの方が気持ちが落ち着く」と回答した人数が増えている。こうした友だちとのつき合い方の特徴が、L群2年生の男子の居場所の選択数の増加にあらわれていると考えることもできる。さらに、自己愛の肯定的な側面に注目するならば、自己愛の高いものはエネルギーで外交的であるとされる(たとえば、宮下, 1991) また、学校で適応していると感じている(檜皮, 2003)という先行研究の結果を部分的に裏付けられたといえるだろう。

自己愛傾向の違いからみた居場所としての認知

自己愛の下位尺度である「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」が高水準の生徒群は、他の人が一緒にいる空間であっても、また周囲に人がいない自分だけの空間であっても、そういった空間を自分の居場所ととらえていることが示唆された。これは、みんなと一緒に楽しくつき合うが自分の本音を出さず表面的で互いに気遣い合う(小塩, 1998)という「注目・賞賛欲求」の友人関係における特徴から考えるならば、みんなと一緒に楽しくつき合う空間とその反対に互いに気遣い合う必要のない自分だけの空間が、どちらも自分にとっての居場所であると考えられていると考えられる。「注目・賞賛欲求」は、注目されたい、賞賛されたいという欲求のみではなく、権威を持ちたいという権力志向的な意味合いを含む(小塩, 1998)という点も考慮すると、他に人と一緒に過ごす空間の中に自分の居場所があると感じているが、自分の本

音を出せない（出さない）しんどさも併せ持っていると考えられる。今後、自己愛の下位尺度で示された特性による居場所選択の違いをとらえる上で、こうした肯定的な側面と否定的な側面の両面からの検討することにより、高校生の心理的な援助につなげることができると思われる。

音を出せない（出さない）しんどさも併せ持っていると考えられる。今後、自己愛の下位尺度で示された特性による居場所選択の違いをとらえる上で、こうした肯定的な側面と否定的な側面の両面からの検討することにより、高校生の心理的な援助につなげることができると思われる。

音を出せない（出さない）しんどさも併せ持っていると考えられる。今後、自己愛の下位尺度で示された特性による居場所選択の違いをとらえる上で、こうした肯定的な側面と否定的な側面の両面からの検討することにより、高校生の心理的な援助につなげることができると思われる。

まとめ

音を出せない（出さない）しんどさも併せ持っていると考えられる。今後、自己愛の下位尺度で示された特性による居場所選択の違いをとらえる上で、こうした肯定的な側面と否定的な側面の両面からの検討することにより、高校生の心理的な援助につなげることができると思われる。

音を出せない（出さない）しんどさも併せ持っていると考えられる。今後、自己愛の下位尺度で示された特性による居場所選択の違いをとらえる上で、こうした肯定的な側面と否定的な側面の両面からの検討することにより、高校生の心理的な援助につなげることができると思われる。

引用文献

- 藤井美保（2003）「居場所」としての学校と子どもたちの対人関係 住田正樹・南博文（編）子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.229-248.
- 秦 彩子（2000）「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究, 26, 97-168.
- 檜皮万里子（2003）高校生の自己愛傾向が学校適応と居場所の選択に及ぼす影響に関する心理学的研究 兵庫教育大学平成14年度学位論文（未刊行）
- 上地雄一郎（2004）自己愛の定義 もろい青少年の心 上地雄一郎・宮下一博 編著 北大路書房 pp.6-7.
- 宮下一博（1991）青年におけるナルシズム（自己愛）的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 小畑豊美・伊藤義美（2001）青年期の心の居場所の研究－自由記述に表れた心の居場所の分類－ 情報文化研究, 14, 59-73.
- 小畑豊美・伊藤義美（2003）中学生の心の居場所の研究－感情と行動及び意味からの考察－ 情報文化研究, 17, 155-167.
- 落合良行（1999）高校生活の意味 高木秀明 編著 高校生の心理 2 深まる自己 大日本図書 pp.159-187.
- 大淵憲一（2003）満たされない自己愛 現代人の心理と対人葛藤 筑摩書房
- 大久保智生（1999）心理的居場所に関する研究(1)－概念の検討と尺度の作成 第8回日本性格心理学会発表論文集, 92.
- 小塩真司（1998）青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司（1999）高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司（2004）青年期と自己愛 もろい青少年の心 上地雄一郎・宮下一博 編著 北大路書房 pp.14-15.
- Raskin,R.,& Hall,C.S.（1979） A narcissistic personality inventory. Psychological Reports, 45, 590.
- 佐々木 聡（2013）女子中学校における学校生活適応感と自己愛傾向との関連 中国四国心理学会論文集, 45, 53.
- 総務庁青少年対策本部（1991）青少年の友人関係－青少年の友人関係に関する国際比較調査－報告書 大蔵省印刷局

- 杉本希映・庄司一子（2006）中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学研究, 6, 31-39.
- Stolorow,R.D. (1975) Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psycho-Analysis*, 56, 179-185.
- 住田正樹（2003）子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文（編）子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.3-17.
- 高橋美知子（2006）高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連について－承認欲求からの影響についての検討－ カウンセリング研究, 39, 28-39.
- 冨永幹人・北山 修（2003）青年期と「居場所」 住田正樹・南博文（編）子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 pp.381-400.
- Wapner,S., & Demick,J. (1992) 鹿島達哉（訳）有機体発達論的システム論的アプローチ 山本多喜司・S.ワップナー（編著）(1992). 人生移行の発達心理学 北大路書房
- Wapner,S., Kaplan,B. & Cohen,S.B. (1973) An organismic-developmental perspective for understanding transactions of men in environment. *Environment and Behavior*, 5, 255-289.